

銭湯へ行こう！

空中温泉が使えなくなったので、街の銭湯へ行こうと鷺羽が提案した時、既に天地は嫌な予感がした。

「銭湯？」

「なんですよ、それ」

「温泉とどう違うんだよ？」

「銭湯は、小銭を払って入る所。温泉は温泉が湧き出しているけれど、銭湯は沸かし湯。まあ、此処の国の文化を学ぶのもたまには良いでしょう」

「砂沙美、行ってみたい！」

「天地様のお国の文化なら是非体験しないとイケませんわね」

「何だか分からねえが、行ってみるか」

「銭湯初めてですよ」

こうして一行は銭湯に行くことになった。勿論、天地の

「じゃあ皆だけで行ってきたら…」

の言葉は、鷺羽の

「さあ、天地殿、行きましょう」

有無を言わさぬ笑顔と共にかき消された。

銭湯に到着するや否や、天地の悪い予感的中した。

「何だ、これ」

「この木札が下駄箱の鍵になるんだって。面白いよね」

「これ、失くさない様にしないと…何処へ入れて置こうかしら…」

「靴の中にも突っ込んでおきなさい、美星殿」

初めての銭湯に、宇宙人一行はキャーキャーはしゃいだ。

「では、天地様、こちらですよ、お風呂は…」

下駄箱に靴を入れると、阿重霞は何故か天地の後をついて来た。

「え、こっちは男湯ですから、阿重霞さんは向こうですよ」

「まあ、しっ失礼しました」

阿重霞が赤面していると、魍呼がゲラゲラと笑って莫迦にした。

「おめー何、調子に乗って天地と混浴しようとしてるんだよ」

「そ、そんなつもりでは…」

「りよ、魍呼！此処はまだ脱衣場じゃないから！」

阿重霞をからかいつつ、魍呼が服を脱ごうとしたので、天地は焦ってそれを止めた。

「何だよ違うのか？」

「女湯はあつちで、脱衣場も向こうだから…」

「ちえ、もっと分かりやすくしろっつーの」

「あんただって、人の事言えないじゃない」

魍呼と阿重霞はぶつくさ言い合いながら、女湯へと向かった。

(この先、思いやられるなあ…)

やはり、彼女達を連れて来るのは間違っていたと、天地は早くも後悔し始めたのだった。

時刻は午後四時を過ぎているが、まだ銭湯の客は少なかった。男湯には天地以外に、初老の男性がいるのみだった。

「ふうー」

天地は湯に浸かると、ほっと一息吐いた。

(なんだかんだ言っても、やっぱり広い風呂は良いよな)

空中温泉の広さに慣れてしまったせいも、最近では広い風呂でないとひと心地つけない様な気がする。温かいお湯、ちゃぼーんという水を弾く音。目を瞑れば、何の迷いも恐怖も無く、この世の極楽に居るような幸福感で心身が満たされる。全てのものから解放された気分。…だが、極楽は地獄の隣にあるものだったりする。

「やーん魍呼さん、お湯こつちに掛けないでくださいよお」

「いやあ悪りい悪りい」

「ちよつと、子どもじゃないんだから、お風呂の中で泳がないでよ」

「あん？お前の身体がお子ちゃまだって？」

「誰がそんな事言ったのよ、誰が！」

「もう、お姉ちゃん達、こんな所で喧嘩するなんてみつともないよ」

「砂沙美ちゃん、魍皇鬼、あの子達ほつといて先に身体洗いましょう」

「私も洗いますう…うわっ！」

(あー…またか…)

賑やかな声が壁の向こうから聞こえてきて、天地は極楽から現実へと引き戻された。魍呼と阿重霞はどっちがスタイルが良いか、どっちが肌が綺麗であるか、飽きもせず言い合っている声がするし、美星はまた何かに躓いたのだろう、ガシャーンと桶が派手にひっくり返る音が響いた。

(全く…！あいつらは…)

女湯にどれくらい客が居るのかは分からないが、公共の場で迷惑をかけてはいけない。天地が大声で注意すべく、息を吸い、「お前ら」の「お」の音を発しようとした時、

「ひえっ」

身体を洗っていた初老の男性が変な声をあげた。天地が男性の方に視線を移すと、妙にスタイルの良い、脚の長い女が立っていた。

「天地っ。せっかくだからさあ、背中が流しっこしようぜ」

天地はそれが魍呼であると、魍呼に抱きつかれるまで分からなかった。

「…うあああああ。何してんだよ、お前は！」

湯船にまで入り、抱きついて来た魍呼を、天地は必死で自分の身体から離れた。

「何って、身体の流しっこ」

「そうじゃない、なんで男湯に来るんだよ、しかも裸で」

「やだねえ。風呂は裸で入るもんだろう？」

「…っ。お前なあ」

「ちよつとお！魍呼、何してんのよ、あんたは！」

女湯側から阿重霞の激しい怒りの声が聞こえてくる。

「へへん、良いだろう。天地と、裸の付き合いつてやつしてんだよ。悔しかったらお前も

こつちに来なよ、お嬢ちゃん」

「莫迦言つてないで、戻れよ」

天地は極力、魍呼を見ないようにしながら、湯船から上がった。

「えー。流しっこしようよ、天地い」

「しないっ。早く戻れつてば」

背中を向けて、天地があっちへ行けと追い払うように手を振ると、魍呼はぶうたれながら姿を消した。

(また、こういうところで瞬間移動して)

焦った天地が男性を見ると、男性は魍呼が消えた方向に向かってありがたやと手を合わせ拝んでいた。天地が呆れていると、再び女湯が騒がしくなった。

「天地様に変な事しなかったでしようね」

「変な事って何だよ？お前、何、助平な事考えてるんだよ」

「キーツ」

「お止め下さいって…」

「美星！お前はすっこんでろ！」

「あ、美星お姉ちゃん、足元に石鹸が…」

「へ？きやあっ！」

ずるんと美星が滑った音が響いたのと、天地が大きく溜め息を吐いたのは、全く同時だった。

「魍皇鬼、ちゃんと髪を乾かさないと、風邪引くからね」

天地が風呂からあがると、休憩室で鷺羽が大きなバスタオルで魍皇鬼を包んで髪を拭いてやっていた。その隣で魍呼が犬の様に頭をブルブルと振って水飛沫を飛ばしながら髪を乾かしている。

「ちよつと、魍呼さん。タオル使いなさいよ」

「この方が早く乾くんだよ」

「全く…どこの動物よ」

「うるせーな。…おっ天地」

タンクトップ姿の魍呼が、天地を見つけると嬉しそうに近づいて来た。

「随分長湯だったな」

（お前が途中で割り込んできたせいだろう）

と、天地は思ったが、言えばまた事を荒立てるので、ぐっと言葉を飲みこんだ。

「ねえ、天地兄ちゃん開けて」

そこに砂沙美が牛乳瓶を持ってやって来た。

「ああ。砂沙美ちゃん、牛乳瓶が売ってあるところに、千枚通しみたいな針無かった？」

「針？んー分かんない」

「それを刺して開けるんだよ」

天地は学校の給食を懐かしく思い出しながら、丁寧に開けてやった。砂沙美は天地の手先に見惚れ、わあっと歓声をあげた。

「はい、どうぞ」

「ありがとう、天地兄ちゃん」

「今でも、銭湯にはこういう懐かしいものがあるんだな」

遠い昔に触れた気がして、天地は少し嬉しくなった。砂沙美が牛乳を飲んでいると、その隣で阿重霞と魍呼がまたしてもバトルを始め出した。どうやら、最後のひとつの牛乳を巡っての喧嘩らしい。二人は睨み合いながら対峙している。

「よおし、阿重霞！ここはジャンケンで決めようぜ」

「望むところですわ」

「後出しはナシだからな」

「それは私が貴女に言う台詞です」

見合いながら、二人は深呼吸をすると、

「最初はグー！ジャンケンポ！」

「すみません、これひとつ下さいな」

「んぐっ」

魍呼と阿重霞が呆気に取られているうちに、鷺羽が牛乳を買い、天地と同じ要領で紙の蓋を取ると、魍皇鬼に飲ませた。

「おい、鷺羽！」

「鷺羽様それはあんまりでは…」

「何があんまりよ。さんざん騒いで皆に迷惑かけてるくせに。私は魍皇鬼にこの国の文化を学ばせたいだけよ。美味しい？魍皇鬼」

「みやあん」

魍皇鬼は満足そうに微笑んだ。がっかりした魍呼と阿重霞は、仕方なく、珈琲牛乳とフルーツ牛乳を飲むことにした。

その様子を見ながら、天地が椅子に座って、自分もフルーツ牛乳を飲んでいると、

「天地さーん」

美星が声を掛けて来た。

「どうしたんですか？美星さん」

「あの、これ何ですか？」

美星が見ていたのは、マッサージチェアだった。

「ああ。お金を入れて、座るとマッサージしてくれる機械ですよ」

「まあ、面白そう！ちよつと私もやってみようかな」

天地と美星はマッサージチェアに座った。天地はお金を入れず、座っただけだったが（座っただけでも、何か効く様な気がするよな）

などと思っていた。美星はお金を入れ、操作をしている。

「あら？天地さん、あまり動かないんですけれど」

「え？そうですか。こっちのボタンを押してみたらどうですか？」

「…んー効果ないです。こっちはどうかしら」

美星が肩と首をほぐすボタンを押すと、何故か天地の座っている機械が動いた。

「み、美星さん…もしかして…」

（もしかして、俺の椅子の方にお金を入れたんじゃ…）

と、言う間もなく、美星は

「効果ないですね。もうちよつと強めにしてみたらどうかしら…」

「強」と書かれている方に、ボタンをずらした。

「あの、美星さん…」

「あらあ駄目だわ。最強にしてみましたよ」

「いっ！」

美星がボタンを最強にすると、天地の肩と首が猛烈に押され始めた。それは、心地よいというよりも、寧ろ、痛すぎて言葉を発せない状態だ。

「ん？何してんだ、美星」

そこに廻呼がやって来た。

「あ、廻呼さん、この機械変なんですよ。強くしても、ボタンを押しても、全然動いてくれなくて…」

「ああん？操作、間違ってるんじゃないかねの？」

（頼む、廻呼。これ以上、変なボタンを押さないでくれ…）

天地は心の中で拝んだ。しかし、その願いは虚しく散り、廻呼は機械ボタンのあちこちを押し始めた。天地は首、肩、腰、そして足をぎゅうぎゅう揉まれ、折れる気がした。

「駄目だなあ」

「故障ですかね？」

二人は苦しむ天地に気が付いていない。

「よし、ここはひとつ、廻呼様の鉄拳を！」

(やめる、廻呼！そんな事して、機械が暴走して俺の首や足がもげたらどうするんだっ) 天地は心の中で叫んだが、揉まれすぎて、揺さぶられ過ぎて、声が言葉にならなかった。

「美星、離れてるよ。よーし！てりやあああああああああ！」

廻呼のチョップでボタン操作の部分は真つ二つとなり、機械は煙を吐いて、止まった。

「あの一廻呼さん…」

「あ、勢い余って壊しちゃった。ははは…」

廻呼は照れ臭そうに髪をかき上げ、

「ん？天地何してんだ、お前」

隣の席で泡を吹いている天地を見て首を傾げた。

「あー楽しかった」

「みやあん」

砂沙美と廻皇鬼は手を繋ぎながら、満足そうに呟いた。

「楽しかったよなあ、阿重霞の体重が分かったりさ、まな板見たいな身体を拝んだりさ」

「ちよつと貴女！いつ、私の体重を見た…私が測定してる時、後ろから覗いたんですわね！なんて人なの」

「良いじゃんか、減るもんじゃないし…あ、お前は体重減らした方が良いけどさ」

けけけと嗤う廻呼を、阿重霞が叩いた。二人はまだ喧嘩する気力があるらしい。天地はその後ろ姿を見ながら今日何度目かの溜め息を吐いた。風呂に来たというのに、その足取りは行きよりも重い。その横で廻羽が微笑んだ。

「…廻羽ちゃん、明日には空中温泉直りますか？」

天地は悲嘆にくれて廻羽に尋ねてみた。

「空中温泉？」

「…だって、空中温泉が使えないから銭湯に行こうって言いませんでしたか？」

「…ああ、そうだったわね」

「そうだったわね…？もしかして…」

天地はジロリと廻羽を見た。廻羽は涼しげな顔で、

「まあ、最初に言った通り、此処の国の文化を知ってるって大事じゃない？ほら、砂沙美ちゃんも廻皇鬼も喜んでるし」

と、言い放った。

(そ、そんな…)

「砂沙美、明日も銭湯来たい！」

「みやああん」

「よし、明日こそ、牛乳ジャンケンだ、阿重霞」

「負けせんわ！」

「マッサージチェアに今度こそ挑戦してみます」

「じゃあ、明日もまた来ましょう」

「みやあああん」

「良かったね、魍ちゃん」

「どうせなら、色んなところの銭湯行こうぜ！」

「魍呼さんが言うと、道場破りみたいに聞こえますわね」

「面白そうですわね」

宇宙人一行は愉しそうに会話をしていたが、天地は肩を落とす、項垂れた。そして、

(もう一度、ゆっくりこの疲れを取りたい…)

と、思ったのである。